

当面の技術対策（農産編）

平成23年6月15日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

天候が回復し、作物の生育も日増しに改善され、変わってきています。ほ場観察をしっかりと行い、作業が遅れないよう注意しましょう。

1 秋まき小麦

(1) 赤かび病防除

赤かび病防除の最も重要な時期です。『出穂がそろった時期』と『1回目防除から7日後』の2回を必須防除として行います。それ以降の防除については、天候と発生状況に応じて防除を実施して下さい。

なお、耐性菌の出現を避けるため、DMI剤(シルバキアフロアブル、リパロフロアブル、フルト乳剤25)の総使用回数は2回以内として下さい。

2 てん菜

(1) 中耕・除草

畦間の除草や土壌の通気性・排水性を改善するために中耕作業を行います。株元までの土寄せは、根腐病を助長するので注意してください。

(2) 根腐病防除

6月中～下旬頃から発生し、連作や短期輪作ほ場で発生が多くなります。そのようなほ場では特に注意し、防除を必ず行いましょう。散布時には、根際までしっかり付着するように散布水量を増やす等の対応をして下さい。

3 馬鈴しょ

(1) 本培土

「萌芽期から約3週間頃」「茎長25cm程度」「着蕾始め」をめどに行いましょう。培土が遅れると根やストロンを傷めるので、早め早めの作業が重要です。

(2) 病害防除

気温18前後の多湿条件では疫病の発生、また、本培土作業時や強風などでの茎葉の損傷に高温多湿が重なると軟腐病の発生が懸念されます。今後の気象経過に留意し、予防的防除に努めて下さい。

4 豆類

(1) 中耕の実施

初期生育の促進と透水性の改善を図るため中耕を実施して下さい。

(2) 病害の防除

【褐斑細菌病】：は種後約1ヶ月後の6月下旬頃より、初生葉に病斑が認められます。中耕などの管理作業により伝染蔓延します。発生が見られたら病株を抜き取り、発生が拡大する場合は薬剤を散布します。

【かさ枯病】：発生した場合は、風雨や機械等の接触により伝搬し蔓延しますので、病株の抜き取りと共に、発生時は10～15日毎に2～3回防除を行って下さい。

【黄化病】：アブラムシの発生程度を考慮して2回目以降の防除を判断します。防除を行う場合には、1回目の防除から1週間間隔で防除を行って下さい。

**農薬使用時にはラベル等で内容を確認するとともに
農薬の飛散に十分注意しましょう！
農作業の安全に注意し、農作業事故の発生を防止しましょう！**